

数年前から南相木村診療所の仕事をお手伝いさせていただいている、高松（道）と申します。あと2年で後期高齢者の仲間入りをする老齢医師ですが、ゆったりした時間の中で診療を行なっています。安定している方が多いのですが、中には精密検査を要するケースもあり、悪性疾患が見つかって専門的治療に移行する方もいらっしゃいます。かつて20年ほど前に、南牧村で3年ほど診療所長として勤務したことがありますが、働き盛りの方もそれなりに受診されていたので、今とやや受診層が異なる印象です。高原野菜で産業基盤があり、農業後継者もそれなりに確保されていることがその原因なのでしょう。



さて、南相木村は、南相木川とその支流である栗生川の沢沿いに家屋が点在し、南牧村のような農業生産に適した土地（むろん、先人の開墾の賜物です）に乏しく、これといった産業にも恵まれない山間の村です。東の群馬県境の少し先には御巢鷹の尾根があり、38年前、日航123便が墜落した当日に本院当直医であった私も錯綜する情報に翻弄されたことを覚えています。

出勤や訪問で村内を移動していると、破れ障子やずれ落ちたカーテンなど人気の感じられない家屋が目につきます。いわゆる「空き家」ということになるのですが、少なく



南佐久地方の名花 ドウダンツツジ

ない数の空き家が村内にあります。仕事を求めて若い人が村外に出て、残された高齢者が村外で子どもたちと同居したり施設入所となったりした結果と考えられ、多くの過疎地が辿るありふれた光景がここでも見られます。村内にも「すずらん荘」という高齢者施設があり、そこでの生活を目標にすることができます。一方、大都市圏でも高度

経済成長期に建てられた団地は居住者の高齢化と施設の老朽化が進み、形は異なっても人がいなくなるという現象は同じだとすれば、いずれもこの国の未来を先取りしたものとして理解する必要があります。そのことを受け止めたうえで、どのような村にしてゆくのかという未知の課題に向き合うことが問われています。